

雲南彝族ニス人の婚姻習俗⁽¹⁾

楊 六 金*

ニス人の青年男女は十七、八才になると、長い人生からみれば短い期間に配偶者を選び始め、結婚をする。相手選びから正式な挙式までの段階において、ニス人はよりよい真の配偶者を得ることを追求する。これには「討八字」（相性占い）、婚約、結納、挙式の日を選定、結婚の宴、結婚後の里帰りなどの順序がある。以下に述べるのは雲南省の紅河ニス人の婚姻習俗の概要である。

1. 配偶者の選択

配偶者を選ぶことはニス人の青年男女にとって人生における一大事である。一夫一婦制の婚姻制度のもとでは、夫婦は同居するのが普通である。まさにそれはある個人が配偶者を選び、その二人が幸福な家庭を築き、共に白髪の伸びるまで終生の伴侶となることを意味している。それゆえニス人の男女各々による配偶者の選択は非常に慎重であり、その方法には以下に挙げるようないくつかの種類がある。

①規定的配偶者選択

規定的な配偶者の選択のほとんどは封建家長制と売買婚姻の中で発生し、そこでは婚姻関係は血縁の継続、財産と権力の継承であり、子供の婚姻は至高の権力である家長の決定に完全に委ねられている。特に解放前、統治階級の内部において、婚姻は往々にして政治的目的を含んでいた。子供には自分の婚姻を問う権利がないため、ただ「父母の命令を媒酌の言」とするよりなかった。「鶏に嫁がば鶏に従い、犬に嫁がば犬に従う」という言い方に象徴されるような配偶者の選択は、結婚する当事者には全く知らされなまま行なわれる

※雲南省社会科学院紅河州民族研究所

ものであった。こうした配偶者の選択は双方の父母に任せられており、結婚する当事者にしてみれば挙式の二日前になって初めて自分が結婚する相手を知るというものであった。

②自由な配偶者選択

一般に適齢期に達したニス人の青年男女は、自由に配偶者を選ぶことが認められており、この種の自由な配偶者選択は比較的広く行なわれている。社交の場、若者宿、民間の祭りの場、婚葬の儀礼の場は未婚の青年男女が愛を語り、配偶者を選ぶ機会となっている。特にニス人の祭礼の時は、青年男女は対歌を通じて配偶者を選び、縁を結ぶ。対歌を通して意中の人を選び、踊りの中で伴侶を探し、楽器の音で心を表現する。これらはニス人の青年独特の愛情表現の方法である。また、市場に集まる時に、青年男女はおしゃれな服を着て短笛、月琴、三弦、二胡、巴鳥、草管などを持ち三々五々市場に集まってくる。集まった路上では、はるばる遠くから来た男女が集い、互いに意気投合していく。もしも双方にその気があれば、男の方は口笛を吹くか声をあげるかする。女の方は頭をあげて男の側を見る。男はハンカチか帽子を取出し女の方にむかって振り、女もハンカチを取り出し男のハンカチの動きに同意したことを示す。この時若い男達は三々五々集まって「相会歌」を歌い始め、女側はそれに答える。その後、男側は女側に風景のよい森で、対歌を歌いに行く約束をする。対歌で歌われるのは「叙情歌」である。別れるとき男女は「辞行歌」を歌い次回の会う場所と時間を約束しあう。会う回数がふえて双方の理解が深まるにつれて、男側は自分の意中の人にプレスレット、指輪、イヤリングなどを贈る。女側も自

分で心をこめて縫った刺繍入りのベルトやサンダルなどを男に贈り、一生連れ添う意志を表す。

このようにニスの青年男女の配偶者の選択は開放的でもあり、やり方は多種多様であるが、当然婚姻にあたって父母の同意と媒酌人が仲を取り持つことが必要であるとされる。

配偶者を求める各段階で歌われる対歌は一般に三つの部分に分かれる。そのうち「相会歌」の内容は非常に豊かであり、男女の対歌である。例えば次のようである。

男側：私の妹よ／あなたの家は東にある／私の家は西にある／二つの家はとても遠く隔たっている／東から太陽は昇る／西に月は沈む／各々一人が両方であれば／会うことも難しい／東と西の双方は／自然に生まれてきたものだ／私達二人の心は繋がっていて／会うことは難しくはない。

女側：私の兄さんよ／あなたの家は西にあり／私の家は東にある／二人は会うのが難しい／兄さんの歌声／歌声は橋梁となり／妹の恋心は橋板となり／歌と心があれば／二人は容易に会える。

「叙情歌」は二番目の部分である。

男側：私の妹よ／兄は君の心を知っている／金銀では真心は買えない／兄は真心を交わしにきた／妹の真心は／蜂蜜のように甘く／兄の心は／火のように熱い／妹の腰は柳の木のように／顔は賽紅桃のように／夜見る夢では／兄はいつも綿花を摘んで／妹に一言問いかける／兄は綿花を摘んで懐の袋にそれを詰めようと思う／妹よ同意してくれるか／

女側：私の兄さんよ／あなたは知っていますか／月は地に落ちない／月は太陽に恋してる／星は地に落ちない／星は銀河に恋してる／山の泉は枯れることはない／それは春の日を追いかける／聡明な兄さん／あなたは知っていますか／妹がなぜ嫁に行かなかったのか／それは兄さんを待ってたから／妹は何年も待っていました／

ずっと会うことはありませんでした／今日は会って／妹の真心を兄さんに贈りましょう。

「叙情歌」の部分の対歌の主な内容は、歌詞で人の心を動かすことであり、だんだんそれは深まっていく。うまく歌うと恋心も深まり、別れられなくなる。

三番目の部分である「辞行歌」は通常次のように歌われる。

男側：私の妹よ／今日で兄と妹は分かれる／兄は妹が逃げていってしまうのを恐れている／兄は安心できない／鉄柵のなかの花木／花の香りが芳しい／人々は美しい花を愛する／いい花は摘まれて持っていかれるかもしれない。女：私の兄さん／妹は兄さんの心を知っています／妹の真心は／軽々しく人にはあげられません／もし兄さんが安心できないなら／町の寺廟へ／廟の中の菩薩様に／兄と妹は誓いを立てに行きましょう。

「辞行歌」は大方すべて青年男女の恋心を表現している。

2. 媒酌、「討八字」(相性占い)、婚約、結納

①媒酌

ニス人にとって媒酌は、規定婚による配偶者選択にせよ自由な配偶者選択にせよ欠くことができないものであり、必ず媒酌人を呼んで婚事の打ち合せをしなければならない。

規定的配偶者選択の場合の媒酌人は、もし男側の父母が自分の息子の配偶者として誰かを選んだ場合、息子はその相手を知らされないばかりでなく、先に媒酌人が決められて(既婚男女はみな可)おり、媒酌人は相手の娘の家に結婚を知らせに行く。もし娘の父母がこの縁談に同意したら、男側の父母はピモ⁽²⁾に「討八字」⁽³⁾を依頼する。

自由な配偶者選択の場合の媒酌人の要請においては、まず愛し合っている二人が自身の婚事について相談しあう、その後男が自分の父母にそれを報告する。媒酌人は前日から女側の家に泊り込み、

もし女側の父母の同意がえられれば、娘の父母は彼女の出生年月日と出生時間を媒酌人に知らせ、媒酌人はそれを男側の父母に報告する。男側の父母はピモに頼んで男女双方の「生辰八字」を照合し、相性が良ければ婚約できる。古代のニス人の「討八字」は、相手側の女がどの氏族の生まれかを問うものであり、彼女の親戚のものまで集められ、それが正室か継室かが調べられた。ニス人は家柄を追求し嫡庶関係は極めて重要であった。

②「討八字」(相性占い)

「討八字」はピモを招いて調べられるが、主たるものは男女双方の「十二獣」が合っているかどうかである。ピモの判断により不適格とされる夫婦もある。鼠と牛、牛と羊、虎と猿、兎と鶏、龍と犬、蛇と豚がそれぞれ合わない組合せである。ニス人の「討八字」からいうと上記の組合せの日に生まれた人は一般に夫婦になれない。

③婚約

この「討八字」で吉凶がわかって結婚できると認められた後、男側の父母は媒酌人にいつ婚約の儀式を行なうかを告げ、媒酌人はそれを女側の父母に伝える。両家が時間を決めた後、男側の父親はいくらかの金銭(普通は数十元)、二斤の酒、一羽の雄鶏を持って媒酌人と女側の家に行って婚約の儀式を取り行なう。婚約の儀式が済むと社会上彼ら二人が「未婚の夫婦」となったことが公認される。しかし実際には女側はまだ男側の家に行ったことがないのである。このような習俗は紅河ニス人のなかに広まって現在に至っている。

4. 婚資を贈る

婚約の儀式が終わってしばらくすると、女側の家に金銭が贈られる。婚資の額は女側の家の要求と男側の家の経済状態によって決められる。昔のニス人の婚資のほとんどは金銭であり、その他の物品は一般に贈らなかつた。男側の家から女側の家に贈られる結納金は、必ず媒酌人を通して贈らなければならない。贈られる物品は必ず偶数で

あり、縁起をかついでいる。女側の家は男側の結納を受け取ったのち、女側の家の父母と話し合っでどれくらいの持参財を持っていくかが決定される。

3. 婚礼儀式

婚礼儀式が含んでいる内容はきわめて複雑である。以上に述べた配偶者の選択、媒酌、「討八字」、婚約、結納はすべて婚礼儀式の準備段階である。

むろん昔も今も、婚礼は婚姻と儀礼が合わさってできたものである。婚姻の発展史が我々に教えてくれるように、人類の社会の発展の初期には、男女の間には性的な結合はあったが、この種の結合は実際上人類の繁栄を保障するものであり、一種の自然(生物的)現象であった。またこの種の両性の関係は厳密にいうと夫婦関係ではなく、それゆえ「婚姻」をなさない。その後社会の発展にしたがって、男女の間の性的結合はある種の規範を形成し、それを基にして相応な婚姻制度と特定の婚姻習俗を形成してきた。この時期の男女の結合は社会的認可を得ることを特徴としている。これが人類の婚姻制度の一大進歩である。

ニス人の婚姻習俗はいったいつ始まったのであろうか?現在のところそれを証明する材料はない。多くの彝文の文献の中には「洪水氾濫以前に嫁を娶る儀礼があった」と記載されている。しかしそれは一種の伝説にすぎない。婚礼自体の意義は祝賀にあるのでありそれは儀礼の挙行を通じて親類縁者と社会に対して婚姻の成立を宣言し、それにより社会の承認と監督を得ることなのである。

①ニス人の婚礼の日の選定

まず男側の父母がピモのところへ人を送り、ピモは婚姻当事者の出生年月日と出生時間をみて判断を下す。ピモの選定する吉日は下記のとおりである。

一月(虎の月) 牛, 兎, 豚, 虎, 鼠の日が吉日。
二月(兎の月) 鼠, 虎, 牛, 犬の日が吉日。

三月（龍の月） 鼠，牛，鶏，犬の日が吉日。
四月（蛇の月） 鼠，猿，鶏，犬の日が吉日。
五月（馬の月） 猿，犬，鶏の日が吉日。
六月（羊の月） 馬，羊，猿，鶏，犬の日が吉日。
七月（猿の月） 馬，羊，猿，鶏の日が吉日。
八月（鶏の月） 龍，馬，猿，犬の日が吉日。
九月（犬の月） 牛，兎，龍，馬，羊の日が吉日。
十月（豚の月） 虎，兎，龍，蛇，馬の日が吉日。
十一月（鼠の月） 牛，虎，兎，龍，蛇の日が吉日。
十二月（牛の月） 鼠，虎，兎，龍の日が吉日。

②新婦を迎える

ニス人が新婦を迎える時，新郎に媒酌人と一組の成年夫妻，新郎より歳の若い男の子，新郎の妹（もし新郎に妹がない場合，他人の妹が代役を務めることができる）が，付き添う。新郎が新婦の家に行くとき，籠をひとつ担いでいく。籠の中には二包みのもち米のご飯と二瓶の酒，二包みの肉，小さい二袋の生米が入っており，それとともに一羽の雄鶏を持ち，これらのものを新婦宅へ携えていって祭礼の品とするのである。その他，新郎の肩には一把の竹製の象徴的な矢が担がれているが，その目的は路上で悪い精霊や妖怪に会った時にそれで射るためである。

③新婦を嫁がせる

新婦が嫁ぐ前日の晩，新婦の妹たちが新婦の家の隣家に集まって，南瓜の種や大豆をつまみ，それを食べながら新婦を慰める。

二日目の朝，新婦の家では豚や鶏を殺して，親戚友人を招いて宴を催す。正午になると新郎は客人たちに酒をすすめ，客人たちは飲み終わった後，自分の気持ちを表明するために各人が持ってきた数十元を新婦側の家に送る。

上述の儀式が完全に終わって，新郎と新婦は自分の品物を一緒に新郎の家に返す。新郎の家に返しに行く時，新婦側の父母も同様に小さい二袋の生米，二包みのもち米のご飯，二瓶の酒，二包みの肉を新郎に贈り，それを背負って家へ帰り，祭礼の品とする。新婦は付き添いの者たちから新し

い服に着替えさせられる。家を離れるとき新婦は泣き始め，「哭嫁歌」を歌う。歌詞は一般に次のようである。

お父さんは気持ちの優しい人でした／お母さんは善良な人でした／今日は何があって／私を嫁がせるのですか／私が小さい頃／お父さんは私をぶちませんでした／お母さんは私を叱りませんでした／幼い頃は幸せでした／夏の日に私がお腹がすいていたとき／お父さんの後について行くと／お父さんは雑穀を食べて／私には米のご飯を食べさせてくれました／冬の寒い日には／お母さんの後について遊んでいると／お母さんは破れた服を着ているのに／私にはいい服を着せてくれました／山の花木は／一年に一度咲き／世間の人生で／一人に一度の美しい時／お父さんとお母さん／私は満十八才になったばかりです／物事がやっとわかるようになったばかりなのに／どうして私を嫁にいかせるのですか／あなたがたが私を嫁にだせば／私は別人の妻となってしまう／針仕事をしなげることでもできず／食事を作ることもできない／あなたたちに食べさせたり／あなたたちに服を着せたりもできない／私を家に留めておいてくれば／私はそれで満足なのです。

娘が嫁ぐとき付き添いの者達が娘の顔を一枚の布で覆う。ニス語でチャンモリ⁽⁴⁾といい，「顔を覆う布」という意味である。布の上には違った色の糸が，結わえ付けられている。その後友人たちが娘に付き添って嫁ぎ先の家に行く。最後に新婦側の家を代表して，成年女性一人および新婦より歳の若い女性一人が同行する。二日目の朝，新婦の二人の兄弟も男側の家へ行く。新婦が嫁ぎ先に行く時，籠を背負って行く。籠には一揃いの祭礼の品が入っており，その時新婦は蓑と笠を身につける。

昔のニス人の花嫁行列は，新婦の家の暮らし向きがいいときは金銀の首飾りと，一對のタンスと衣裳箱，二組の布団，一對の枕，いくつかの衣服と靴を持っていった。現在の暮らし向きのいい家では金銀の首飾り以外に，テレビ，ラジカセ，洗濯機，ミシン，タンスなど高価な品物を持って行く。

④泥で新郎を迎える

娘が嫁にいったその日、新郎が家に戻るとき、娘の村の青年男子と子供は泥を新郎にぶつけてよい。子供たちがまず路傍に藤蔓を結わえ付けておいて、その後泥の塊を積み上げておいて、新郎と付き添いの一行がくるのを待って、準備の整った泥を新郎たちめがけてぶつける。付き添いたちは命からがら逃げたり隠れたりするしかない。それゆえ賢い新郎はとっくに準備をして、先に別の道を探しておいて、人の注意がそれている間に村の外へ逃げだしてしまう。新郎が泥をぶつけられて、泥だらけになると往々にして青年男女の爆笑を買うことになる。

⑤ピモの邪気払い

新郎と新婦は嫁ぎ先の家の門の前に着いた時、新郎は左側に立ち、新婦は右側に立ち、ピモは門の内側から新郎新婦に直面して「驅邪経」を暗唱する。天下は人の世界／今日はよい日だ／新郎と新婦は／今日は夫婦になる／外に居る悪霊よ／新郎を害してはいけない／外に居る妖怪よ／新婦を食べてはいけない／悪霊よ飲みなさい／外には肉もある／妖怪よ食べなさい／外にはおいしいご飯がある／あなた方は腹いっぱい食べたら／ここから速やかに立ち去りなさい／もしそれを聞かないのなら／弓で射殺してしまうぞ。

この呪文を唱えおわると、新郎と新婦は家の門にあらかじめ掛けられていた糸を切り、ピモは祭礼の品を受け取る。新郎と新婦の二人は母屋に入り、三度額づいてからやっと新婚部屋に入ることができる。

⑥「開新房」(新婚の夜に押し掛けていってからかう習慣)

新郎と新婦はピモの邪気払いが終わるのを待って新婚部屋へ入る。このとき若い人たちは祝いの砂糖菓子を食べ「開新房」をする。「開新房」の時には、啞然とするような様々光景が繰り広げられるので、新婦は面の皮をいくぶん厚くしなければならない。そうでなければ、若者たちはまだまだ

だ奥さんとして一人前ではないといって新婦をからかうのである。そしてニスの娘達には「手も一対ある。口も一つある。」とそのからかいから自分で身を守ることが要求されるのである。

⑦「敬酒」

新婦が嫁ぎ先に着いた二日目の朝、結婚の宴の用意が始まる。宴は一般に豚と鶏を殺し(羊を殺すニス人もある)、宴には遠近の親戚友人が招かれる。昼食後、新郎と新婦はお盆を持ち、お盆には大碗ひとつと二つの酒碗、一瓶の酒がのせられている。新婦は酒を両手で持ち、新郎は賓客に酒を注いで回る。酒を注いで回るとき、賓客たちは数元をお盆にのった大碗のなかに入れる。酒を注いで回るのが終わった後、盆の上の金銭を数え、元と角に分け、ちょうど切りのいい数の金銭は男側の家のものになり、端数は新郎と新婦と付き添いたちで分けられる。このようにして宴は終わる。

⑧里帰り

男側の家での宴が行なわれた当日の午後、新郎と新婦は新婦の家に行く。新婦の家に行くときもち米のご飯と肉、餛などを用意し新婦に持たせかける。新婦が家に戻った晩、新婦の付き添いたちはめいめいに二つの卵、調理済みの落花生や大豆を持って、新婦の家で一緒に食事をする。食事をする前に付き添いたちはいくつかの食卓を並べる。それには大碗だけを載せておき、後で新郎の方を向いて祝いの餛等を食べる。新郎は卓上の碗のなかに餛などを入れる。新婦の付き添いたちは「新郎さん容器が小さすぎるよ」と遠慮なく言ってよい。必ず新郎は持ってきた餛等をすっかり分けてしまわなければならない、分けてしまうと彼は満足する。付き添いのものたちが食事を終えると、新婦を嫁ぎ先に送っていく。紅河県の宝華一帯のニス人の決まりによると、新郎と新婦は当日の夜に必ず里帰りをしなければならない。二日目からは妻としての職責を果たさなければならない。

上述の彝族ニス人の婚礼の過程には、非常に豊富な内容があることがわかる。結婚の儀礼の全過

程には、配偶者の選択、媒酌、「討八字」（相性占い）、結納、婚約、吉日の選定、嫁入りなどの順序があった。これらは正式な婚礼のために事前の準備であるけれど、それらは婚礼の一部でもあり、またそれぞれの場面に相応する儀式でもある。これらの儀式の中にはまだ古代のニス人の歴史文化の痕跡が保たれている。

【訳註】

（註1）ニス人：漢字では「尼蘇人」が当てられている。彝族の「支系」（種族的集団）とされており、雲南省南部の紅河地域に住んでいる。

（註2）ピモ：漢字では「畢摩」、彝族の經典「彝文」を読むことができ、それにより各種の儀礼を行なう司祭職。

（註3）「討八字」は「生辰八字」つまり新郎新婦それぞれの生まれた年月日と時刻の十干十二支を比べて相性を占うものである。劉堯漢によれば彝族の「十二獸」は十干十二支に合わせてあるわけではなく、十二支と同様の十二種の動物の連鎖が使われているに過ぎない。この記述からは特定できないが、十干に対応するものはニス人にもない可能性が強い。

劉堯漢1980「“十二獸”曆法起源于原始图腾崇拜」『彝族社会歴史調査研究文集』民族出版社 pp. 78-99（原載『中国天文史文集』民族專集，科学出版社1979）42ページ参照。

（註4）チャンモリ：漢字で「張某利」が当てられている。

（稲村 務／筑波大学大学院歴史・人類学研究科 訳）

新刊紹介

仲松弥秀著

『うるまの島の古層 — 琉球弧の村と民俗 —』

本書は、仲松弥秀氏による最新の沖縄民俗論集である。「うるまの島」とは珊瑚の島の謂で、沖縄島を柱とした琉球弧の島々をさしている。この美しい表題については、本書の冒頭に「祖霊神により添い、豊饒はもちろん、珍しい文化をもたらししてくれる外洋からの来訪神に感謝しつつ、生命ある大自然と手を取って、水平的平等性の共同体社会をつくって来たのが、うるまなる沖縄の島々であった。」と述べられている。この一文は、著者がこれまでに『古層の村』（1977年 沖縄タイムス社）や『神と村』（新版1990年 泉社）等で展開してきたさまざまな沖縄文化論を集約したのもでもあり、仲松氏の民俗学を象徴する表題としてみる事ができる。

本書は、1970年から90年代にかけて発表された11篇の論考から構成されている。第一章では

「うるまの島、沖縄」「琉球弧の地名」「テラとミャー」「国見の行事」「オナリ神」「グスクと城」「イノーの民俗」「渚の民俗」等の文章を取り、珊瑚の島の世界観を構成する様々な要素を取り上げている。第二章は仲松氏による本格的な沖縄村落論である「村と生活」と「沖縄の村落共同体」の2篇から成る。第三章の「琉球王国をどうみるか」では、国家としての琉球王国像の再検討を通して、本土（ヤマト）と琉球の比較上の問題点を指摘しており、比較民俗学の観点からも興味深い論が展開されている。いずれの論考も前二著の延長上に位置するものであり、併せ読むことで一層の理解が得られるものと思われる。（萩原左人）

A5判 302頁 泉社
1993. 10月刊